



青春小説
清水義範

江苏工业学院图书馆

藏書章

說

講談社

清水義範^{しみずよしのり}

昭和二十二年十月二十八日、名古屋市中に生まれる。愛知教育大学卒。『国語入試問題必勝法』（講談社刊）によって昭和六十三年度吉川英治文学新人賞受賞。著書は他に『グローピング・ダウン』（講談社文庫刊）、『蕎麦ときしめん』『永遠のジャック&ベティ』（ともに講談社刊）、『金鯢の夢』（集英社刊）等。

「青春小説」

1989年9月11日 第1刷発行

1989年10月25日 第2刷発行

著者 清水義範

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一〇二
電話東京（〇三）九四五―一一一（大代表）

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

定価 九五〇円（本体九二二円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りします
送料小社負担にてお取替えいたします。なたします。…
ついてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出します
にお願いいたします。

© Yoshinori Shimizu 1989 Printed in Japan

目次

三億の郷愁 5

灰色のノートから I 129

灰色のノートから II 193

あとがき 256

装幀 山藤章二

「青春小説」

三億の郷愁

1

そのカメラの自動焦点方式が、従来のものとうどう違っていて、いかに優^{すぐ}れているかという説明文をようやく書き終えて、浅井泰雄^{やすお}は大きく伸びをした。ふーっ、と大きく声をもらす。

「あ、そっち終ったんですか」

座机^{すわりつくえ}の方で〈タウン情報〉の原稿を書いている江藤が首をもたげてそう言った。

「まだだ。あと、写真のキャプションを書かなきゃいかん」

言いつつ浅井はタバコに手を伸ばす。それからふと部屋の中を見まわし、煙がたちこめているのに気づくと、立ってサッシの窓を開けた。

「明かるくなってきましたね」

「徹夜明けのこの時間って何となく嫌な気分なんだよな。妙に焦^{あせ}っちゃって」

「そうそう。雀^{すずめ}の声なんか聞こえ始めると、とんでもない悪事でも働いてたような気がしてくるんですよね」

そういう感情は自分だけのものではなかったのか、と知って、浅井は表情を弛^{ゆる}めた。吸いすぎてるな、と思い、タバコをやめる。

「熱い茶をいれるよ」

「あつ、いいですね」

浅井は台所の方へ行く。江藤邦昭^{くにあき}は畳の上にひっくり返り、真新しい天井板の木目^{もくめ}を見ていたが、すぐにそれが全く同じパターン^{パターン}の繰り返しであることに気がついた。印刷された人造の木目なのだ。

そこは新築してまだ半年の浅井の自宅だった。彼の妻が子供を連れて実家へ出かけているというので、おせおせになっっている仕事を、うちで徹夜で片づけてしまおうぜ、ということになったわけだ。終ったら翌日は日曜日だから、近くの川で釣^つでもしよう、という計

画である。

マイホームを持っているとは言うものの、それはたまたま妻の実家の援助があつて建っただけのことで、浅井の生活に余裕があるわけではない。江藤も同じである。大手出版社の編集者だったのに、組合運動をやつて他の十数人とともに解雇になつてしまつたのが五年前である。それを不当解雇だとして法廷闘争を続けているのだが、闘争資金を稼ぐために仲間でプロダクションを作り、いろんな会社の下請け編集業をやつてやつと生活している状態だ。今、二人がやっているのはカメラ会社のPR誌の編集であつた。

そんなわけで、ようやく手に入れたマイホーム、とは言うものの、八王子市内とは名ばかりで、丘の斜面を切り取つた僅かな平地にやつと建つた建坪十六坪の粗末な普請。オフィスに通うのに二時間近くかかるという大変なしろものである。天井板の木目がプリントなのは当然のところであらう。

浅井はいわゆる団塊の世代というやつだが、江藤の方はまだ三十歳にならない。その江藤は起きあがつてトイレに行った。

昭和五十九年の六月末の土曜日、いや、もう明け方近いから月が変わつて七月一日、日曜

日のことである。

お盆とポットを持った浅井が現れて、座机の方でお茶を入れているところへ、江藤がトイレから戻ってきた。

「雨やんだみたいですよ」

「そいつはいい。そろそろ晴れるはずだって言った通りになったな」

江藤はそれには答えず、

「しかしすごいですね。トイレの窓のむこうはすぐ崖がけですよ」

「今時家いまどきを建てりゃあみんなそんなもんだよ。それでいて、ローンにはたっぷり悩まされるんだからかなわん」

熱くて渋いお茶がはいり、徹夜でぼうとなった頭をカフェインが快こころよく刺激する。江藤がタバコに火をつけると、やはり我慢できなくて浅井も吸ってしまふ。

タバコを吸いながら、江藤は部屋の隅すみの本棚に並んだ本を見た。ほとんどが文庫本で、その八割以上が推理小説である。

「大抵のミステリーは揃そろってますね」

「近頃はそんなものしか読めなくなっちゃったよ。それでも、学生時代はパチンコの景品でマルクス全集を揃えてたのになあ」

「ふへ。ぼくなんかマルクスなんて読んだことありませんよ。そうか。浅井さん、全共闘の世代だもんね」

「一応ね。でも揃えただけで、ほとんど読まなかったんだ実は」

そう言って浅井は笑った。

「この本、どれか借りていいですか」

「うん。好きなの持っていけよ」

江藤は本棚の方ににじり寄って、物色をする。もう一口お茶をすすって、浅井は湯呑みを畳の上のお盆にのせた。

「さて。もうちょっとだ。片づけちまおうか」

江藤が振り返る。

「そうですね。やっちゃいましょう」

浅井が椅子にすわり、江藤は座机の前に尻をすえた。サインペンを持って、二百字詰め

の原稿用紙にむかう。

ちょうど、その時だった。

いきなり、大音響とともに地面がビリビリと震えた。津波が襲来したような大きな音だった。

「地震だ」

江藤が座机にへばりついて叫んだ。

「近いすよ」

「違う。近すぎる」

浅井は部屋の入口の柱が大きく傾いていくのを見た。

「わっ」

叫んだ時、電灯が消えた。

ギギッと柱のきしむ音がし、バリバリと板切れが碎ける。

事態の意味を悟る間もなく、二人は天井を破って流入してきた土砂にのまれた。

安普請だったおかげで壁があつという間に突き破れた。そのため、二人は土砂に流されるように屋外にほうり出され、圧死をまぬがれたのだ。

浅井は一度も意識を失わなかった。半身が土砂に埋まったまま流されながら、バリバリと音をたててマイホームが潰れていくのを認識していた。まだローンがほとんど残っているのに、という考えが頭をかすめた。

そのとたん、口の中に泥が入ってきて、危うく窒息しかかった。じやりじやりした泥をげつと吐き出す。土砂の流れはようやく治まった。

湿った土の山に下半身を埋めて彼は投げ出されていた。もう夜は明けて、朝の光が穏やかにさしている。

土くれの中を見まわした。江藤はどうなってしまったのか。

すぐ後ろに、全身泥だらけになった男が四つんばいになってうめいていた。

「おい」

喉にひっかかったような声しか出なかった。

「大丈夫か」

江藤は頭をあげた。その顎のあたりに血が流れているのを見てギクリとする。

「痛え」

江藤は顔をしかめて手を口へ持っていた。

「どうした」

いきなり江藤は激しくせき込み、何度も唾を吐いた。唾液に赤いものが混じっている。

ようやくむせるのを終えた江藤は情ない声を出した。

「前歯が欠けちゃった」

「それだけか。ほかは何ともないのか」

江藤は土くれの中で半身を起こし、手足を動かしてみる。心配するほどのことはなさそうだった。

「ほかは、どうもなっていないらしいです」

浅井はほっとして、自分たちを流してきた土の山の方を見た。土流の先端部で流されたから体にのしかかる土の量が少なく、^お押し潰されずにすんだのだ。

しかし、土くれを見た浅井は言いようのない奇妙な異和感を覚え、なぜかドキリとした。家が潰れたことは悲劇だがそれはそれで明確な事態だ。そのことじゃなく、周囲の状況がどこか異常だった。

「何だったんですか」

それに答えるのは容易だった。

「土砂崩れだよ」

「そうか。家の裏の崖が崩れたんだ」

江藤は土の山を見て言った。

「ここんとこずっと雨が続いていたから……」

そこまで言っただけに口をつぐむ。誰の目にも異常は明らかだった。

目の前に二人が押し流されてきた土砂の山がある。しかしそれは、全部でトラック一台